研究のまとめ
（2023 下中小学校）

学び合い、高め合う子どもの育成
～子ども主体の授業をめざして～

今年度は、本研究テーマを掲げて２年目を迎えた。昨年度の研究では、５つの要素（考える必然性、考えの根拠の明確化、考えの相違の自覚化、考えの共有、教師の関わり（出場））を授業づくりの重点に設定し、副題にある「子ども主体」を意識して研究を進めてきた。それにより、教師主体の授業から脱却するという教師の授業づくりにおける意識の変化が広がった。児童の授業に参加しようとする姿勢や、友だちの話を聞こうとする姿勢などに変化が見られ、全体として主体的に学ぼうとする児童の姿が見られるようになってきた。一方で、「子ども主体」について「児童の発達段階や、教師の考え方による認識のずれ」や「系統性や教師の出場をどのようにしていくか」という課題があった。

そこで、今年度の研究では、次のように「研究の重点」と「研究の手立て」に設定した。

【研究の重点】
① 児童の実態に合わせて「子ども主体」をより具体化し、児童の資質・能力の育成を図る。
② 学校経営グランドデザインとの関連を図り、児童と教師一人一人が認め合い、支え合いながら「めざす児童の姿」を意識した授業づくりを行う。

【研究の手立て】
① 「子ども主体」という言葉の捉えを共有化する。
② 連続性を意識した研究を行う。
③ 教師の関わり+４つの要素を意識した授業づくりを行う。（昨年度の５つの要素）
④ 「聴く力」の育成を意識した学級づくりを行う。

また、研究組織を低・中・高・支援級の４ブロックに設定し、それぞれの実態に合わせて、「目指す児童の姿」を話し合った。各ブロックの推進委員を中心として年間を通して研究を行ってきたことで、新たな成果と課題が見出されてきた。

支援級ブロック「進んで課題に取り組む児童」

・子どもたち個々の実態に合った課題設定ができた。
・ワークシートを工夫し、進捗状況・達成感を可視化した。また、複数の内容に取り組む姿が見られた。
・つまずいている児童のつぶやきを隣の児童が拾い、拾った児童のつぶやきで答えが分かったという姿も見られた。（関わりを通してお互いを高め合う姿）

・「自閉傾向の強い児童はルーティーン的な内容の方が安心する」など特性の理解を深め、より個に応じたできるようにしていく。
・子どもたちの特性を理解した教師の声かけが大切。
・標準をつくらない、ゼロプレッシャー、多様な認め方が、友だちと協働する力を育む。
・教師が子どもたちの弱いところ（できないところ）も徹底的に認めていく。

低学年ブロック「安心して、話したり聞いたりして、楽しんで活動する児童」

・グループ編成を工夫することで、児童同士が話し合いながら、なるべく全児童が解決に向けて活動することができるようになった。
・今までの学習の積み重ねやつながりを掲示することで、学習意欲の高まりにつながった。
・板書などで、色分けをすることで、活動内容を正しく意識して書くことができていた。（視覚支援が理解を深めるうえで有効であった。）
・ICT を活用したことで、書籍の情報量を吟味し余分な情報をカットして、同じ資料をクラス全員で使用できた。このことで、活動をしながら友だちの考えを聞いた後、加除修正を行うことができた。

・最後のまとめ方で、実態に応じた全員が活動できる共有の仕方・方法を取り入れていきたい。
・学びの連続性を考え、年間指導計画における教材の位置づけ（系統性）をし、まとめを意識した単元計画および単元をまたいだ積み重ねができるようにしたい。
・児童の実態に合わせ、提示する情報量を見極めていき、情報の整理を主語・述語（動作）など時間の経過を追って考えていくなど方法を丁寧に指導していく。
・子どもが楽しい！学びたい！と思う視覚教材を取り入れ、関連図書の活用を進められるようにする。

中学年ブロック「自分の思いや考えをもち、進んで伝える児童」

・物語の全体の流れを確認するとともに、出てきた問いを重ねることで、場面を詳しく読んだり考えたりする学習への必然性が生まれた。
・板書や掲示物など視覚的な手立てにより、児童の振り返りや考えの根拠となった。
・ノートやワークシートに自分の考えを書き、伝える、読み合う、サインをもらうなど関わり合う活動を位置づけることで、他者の考えを知り、自分の考えが広がったり深まったりすることにつながりやすい。

・「聴く」を大事にする学級づくりから。
・子ども自身がゴールをはっきりともつ単元構想。
・教師のねらい（目指す資質・能力）と子どもの願いを融合した単元づくり、学習問題づくり。
・どの子も同じ土俵にのって学習できる手立て（視覚的・継続性・習慣的）
・ICT 機器の効果的な活用、図書室の有効活用。

高学年ブロック「進んで考えをもち、関わり合いを通して考えを深める児童」

・初発の感想で出た児童の疑問に寄り添って学習を展開したことで、「話したい！」という意欲が高まった。
・話し合いの隊形や教室環境を整えることで、児童の思考の助けとなった。
・短冊や心情円・オクリンクなど、友だちと自分の意見を比べられるようにしたことで、考えの相違が捉えやすくなった。話し合いの争点を生み出すことにもつながった。
・ノートやワークシートから児童の考えを事前に見取っておくことで、話し合いの流れを予測したり、意図的指名をしたりして話し合いを深めることができた。

・次の授業で何をするのか、何のための活動なのか児童が見えているようにする。
・評価基準を満たしながら、児童の疑問(思考)に寄り添った授業展開をする。
・子どもがどのように考えているかの見取りをしっかり行い、授業にいかす。
・友達と自分の考えを比べられるようにしておき、児童の思考を深める。
・発問の精選。話し合いで争点化するポイントや児童の考えから立ち止まるポイントを捉えておき、児童がそこに触れた時に出せるようにしておく。

研究テーマに向けて、各ブロックの「目指す児童の姿」を意識した研究を行ってきた。研究の手立て②「連続性を意識した研究」では、授業研究の成果や課題を各ブロックで共有し、年間を通して研究を進める様子が見られた。「子どもを主語」とし、主体的な学びをデザインする視点で研究を進められたことにより、子どもたちが必要感をもち、友だちと関わり合いながら学習に臨む姿が増えてきた。本校の「授業アンケート」の質問項目「友だちから『すごいね』などと認めてもらえる」の結果では、肯定的回答が 76.7%（７月）から、88.3%（２月）と向上した。友だちと関わり合う活動から、相手から認められ、自己肯定感が高まった児童が増えたと考える。

今年度の全体反省では、「子ども主体」という言葉の捉えの難しさが課題として挙がった。引き続き、「子どもを主語」とした対話や関わりを意識した授業を続けていきたい。自己肯定感の高まりが、児童の自信につながり、研究主題「学び合い、高め合う子どもの育成」につながっていくと考える。